

## 「芭蕉の旅と一病息災」 ( 協同組合通信/金曜論弾 ) 16.6.18

俳聖松尾芭蕉が、三重県伊賀地方に生まれて今年が 360 周年。三重県は一丸となって、芭蕉にあやかっていたイベントを繰り広げている。その生誕地は伊賀と上野が各々主張し、諧謔の可笑し味がある。

芭蕉は、1689 年（元禄 2 年）に江戸を旅だった「奥の細道」で、江戸文化の爛熟期であった元禄時代の俳人かつ随筆家。故郷を捨て旅の空をさすらい、終に、我国俳壇に歴史的な蕉風俳句を完成させた。

古来、我が国にも旅をしつ、和歌や日記に紀行文、さらにはエッセイをものにした気骨ある文人論客の先達も数多い。負けず劣らず、芭蕉も旅から旅への行脚を重ね、「笈の小文」など多くの紀行文と名句を各地に残し、日本語の乱れる今も燦然たる輝き。その格調高き 17 文字に賭けた精神力の強さと力量は秀逸無比。

「奥の細道」だけでも、随行した弟子の曾良の随行日記を含め、天気の詳細の多さと詳細な記述の量に、改めて感心する。天気で元気を回復したものか。気象や古気候の研究者にとっては、素晴らしく貴重な気象データの宝庫。

おりおりの季節（当時は太陰暦）を詠んだ名句にあふれている。生を受けた人間の儂さ、帰らざる時を見つめ、意識を注ぎ、歌心として自在に発する大和言葉に、移ろう季節に託し活写した一句の深さと重みの意味が、翁の年も過ぎてしみてくる。

芭蕉の旅日記を読んで分かったことがある。意外にも、体調維持に呻吟している。旅は胆石症からくる胃痙攣との戦いであり、我が身をだましましの苦しい道中だった。

現代の交通の利便性に慣れている私には、想像を絶する辛く厳しい日々であったと衿を正す。

人生 50 年の江戸時代。齢 46 歳に達し、既に翁といわれ、渋さを通り越し枯れた風貌で、杖をつき蓑を携行しての陸奥の長旅。経済的支援者でもある弟子達と、黙々と枯野を歩いて、夢幻を彷徨った。

この直向さこそ、頭を垂れて偉大な業績を偲ぶ価値がある。

「五月雨を集めてはやし最上川」

轟々と降り募る激しい梅雨の最中、日本海の川面に達し、大自然に向き合う眼差しの強さで、風景と時間を留めた名句の季節が訪れる。

( 気象情報システム株式会社 高 津 敏 )